

Kanazawa Cultural Resource Studies

No. 21

Museum as the Center of the Transmission of Cultural Heritage

edited by
NOZOMU KAWAI, RYUICHI TANIGAWA

 Center for Cultural Resource Studies
Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University

金沢大学 文化資源学研究 第21号

金沢大学人間社会研究域附属 国際文化資源学研究センター



文化資源学研究

第21号

文化遺産の発信地としての博物館

河合 望・谷川竜一 編

 Center for Cultural
Resource Studies

金沢大学人間社会研究域附属
国際文化資源学研究センター

文化遺産の発信地としての博物館

河合 望・谷川竜一 編

金沢大学人間社会研究域附属
国際文化資源学研究センター

Museum as the Center of the Transmission of Cultural Heritage

edited by

NOZOMU KAWAI, RYUICHI TANIGAWA

Center for Cultural Resource Studies
Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University

はじめに

—文化遺産の発信地としての博物館—

金沢大学新学術創成研究機構
文化遺産国際協力ネットワークユニット
河合 望・谷川竜一

1. はじめに——文化遺産国際協力ネットワークユニットの活動

金沢大学・新学術創成研究機構に属す文化遺産国際協力ネットワークユニット（ユニットリーダー・河合望。以下、文化遺産ユニット）は、2018年2月12日（月・祝）、金沢市しいのき迎賓館において、国際シンポジウム「文化遺産の発信地としての博物館」を開催した。本論文集は、そのシンポジウムの記録であり、同時にそれを主催した文化遺産ユニットの3年目の活動報告でもある。

本論文集の説明の前に、新学術創成研究機構・文化遺産ユニットの紹介をしておきたい。

新学術創成研究機構は、新しい学問分野・学問領域の創成につながる学際的な研究を推進することを目的として2015年4月1日に金沢大学に設置された研究機構である。3つのコア部門からなり、その中には合計16のユニットが設けられている。その「未来社会創造コア」内に文化遺産ユニットは属している。

文化遺産ユニットの目的は、文化遺産の保全や活用をテーマとし、国際的な観点にもとづきながら多様な専門家や市民と連携することで、よりよい未来を多くの人々と共に創造していくことにある。特に金沢大学は国際文化資源学研究センターを中心に、世界各地の有形・無形の文化遺産を中心とした研究がさかんであり、関連する人材・知見の厚みは国内有数と言ってよい。当然、同センターのスタッフも文化遺産ユニットに参画教員としてメンバーに加わっており、設立以来3年の間様々な活動を共同して行っている。具体的には初年度にいくつかのセミナーや会合を開いて本ユニットの計画を立案した後、2年目以降はシンポジウムを継続して開催し、文化遺産を通じた情報と人材のネットワークを活発に行ってきた。

最初のシンポジウムは2017年1月に行ったもので、そのテーマは「世界遺産と共に生きる」である。このシンポジウムでは2年間のユニット活動を振り返りつつ、それを契機として関係者の間で今後の展望を議論することができた。タイトル通り、このシンポジウムでは文化遺産ユニットの目的の一つである、文化遺産を活用したよりよい社会の実現を念頭に、特に世界遺産と地域社会の関係性に絞って議論を行った。

この第1回目のシンポジウムの成果を踏まえ、第2回目のシンポジウムを計画したわけだが、そこで議論となったのは文化遺産と地域社会を結びつけるような「装置」の重要性である。第1回目では世界遺産という「大きな」文化遺産を対象としたが、それは全体から見ればごく一部の文化遺産に過ぎない。個別の遺物や美術品から考古学で言う遺構や建築物まで、様々な文化遺産をどのように結びつけて扱っていくのか。そうした点を考える際に重要な施設として博物館があげられる。今回のシンポジウムではそうした議論の流れのなかで、博物館に焦点を当てることとなった。

2. 文化遺産の発信地としての博物館——シンポジウム及び本論文集の構成と内容

今回のシンポジウム「文化遺産の発信地としての博物館」では、国内外の考古学博物館、遺跡博物館に携わる専門家が参加し、文化遺産としての遺跡の価値を発信する博物館の現状や今後の可能性に

ついて議論を行った。以下では当日の様子と、本論文集に収録された各発表を簡単にまとめておく。

まずシンポジウムの開催にあたって、中村慎一・新学術創成研究機構長から、以下のような挨拶があった。

金沢大学新学術創成研究機構の中村慎一と申します。新学術創成研究機構は3年前に発足しました。金沢大学で最も新しい組織の一つと言っていいかと思います。

その新学術創成研究機構は、融合研究を掲げておりますので、多くの理工系、あるいは医学系の先生方と共同研究を進めております。いわゆる文系からは実はこの河合先生、谷川先生をメンバーとするユニット（文化遺産国際協力ネットワークユニット）が機構の中にただ一つ含まれていまして、いわば我々文系のトップランナーとして加わっていただいています。したがって本日のシンポジウムは、文化資源に関する研究発表の場であるだけでなく、文理を横断する多角的な視点や、あるいは両分野が考えるべき本質的な話題が議論されるであろうと私は期待しています。

なかでも今回は、エジプトからフセイン・バシール先生をお招きすることができました。また羽咋市から中野先生もお越しいただきました。そういう中で、近年たいへん大きな話題となっております文化資源研究における博物館の役割というものを再確認し、またそれを我々が研究面あるいは学生の教育面で、どのように活かしていくのかということを探求していければというふうに考えています。会場の皆さまには最後までおつきあいいただければと思います。また、今後とも新学術創成研究機構をよろしく願いいたします。

この中村機構長による挨拶を通じて、文化遺産ユニットは機構内でも文系を中心として組まれた特徴的なユニットであり、未来社会を歴史的な観点から展望・構想する目的を持っている点が確認された。より具体的には、文化遺産ユニットは文化遺産がこれからの社会において持ちうる新しい価値を発見・発信する役割を持っていると言えよう。

この後、エジプト・アレクサンドリア図書館附属考古学博物館館長のフセイン・バシール氏の基調講演があり、その後は4人の研究者の発表が続いた。それらの発表内容は、本論文集に掲載されており、詳しくはそちらを参照して頂きたいが、簡単にその概要だけをここで記しておく。

まず、基調講演は、世界最古の博物館として名高い「ムセイオン」があった場所に再建された、エジプト・アレクサンドリア図書館附属考古学博物館の館長フセイン・バシール氏によるものであった。同氏の発表は、アレクサンドリアの歴史を振り返りつつ、その図書館・博物館の歩みや現在の取り組みを紹介するものであった。アレクサンドリアが遙か古代の昔だけでなく、それ以降ずっと近現代に至るまで世界的に注目されてきたこと—もっと言えば、人類の歩みを示す遺物を人類がずっと求めてきたという歴史を示す場所であることがよく伝わってきた。新しい博物館・図書館の建設中に地中から出土した遺物も重視し、人類の歴史を示す施設とともに、博物館・図書館のある地域の生活や文化も含めた展示を目指しているという。フセイン氏は、本シンポジウムのために遠いアレクサンドリアからはるばるお越し下さった。ここに御礼を記しておきたい。

次に個別の発表が4つ行われた。最初は、金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター教授で、文化遺産ユニットの参画教員でもある中村誠一氏の発表であった。マヤ文明に関する世界的権威の一人である同氏は、ホンジュラス・コパルイナスの博物館の設立を、地域住民と協力して進めており、同氏を媒介として金沢大学の学生も博物館の展示空間のデザインに参加している。研究協力・地域貢献・教育活動が国際的に展開した注目すべき現在進行中の活動として、同博物館の取り組みが発表・紹介された。

二番目の発表は、同じく本学国際文化資源学研究センター特任准教授の秦小麗氏による、カナダの

ロイヤル・オンタリオ博物館（ROM）の考古学研究と関連展示をテーマとした報告である。秦氏は同博物館での勤務経験があり、具体的な体験談を交えた分かりやすい発表となった。例えば ROM のスタッフには、三カ国語以上の言語を話すことや、研究対象地域と密接な関係をもつことが求められているという。秦氏の説明は、同博物館内の図書室や大学との連携活動などを、歴史的な観点から議論するものであり、長い年月をかけて極めてシステムティックな知的基盤が ROM にできあがっていることがよく伝わってくるものであった。

三番目の発表は、本学国際文化資源学研究所特任准教授である吉田泰幸氏の発表で、日本の古墳とそれを取り巻く環境の歴史の変遷をたどるものであった。発表において多くの聴衆が興味を持ったのは、ここで紹介された古墳に対する周辺住民たちの向き合い方である。彼ら・彼女らは古墳を訪れる時は必ず一礼して、決められたルートで参内する。この古墳は発掘調査がなされていないらしく、古墳の聖性が保たれている（あるいは逆に獲得された）のはそうしたことが理由にあるようであった。文化遺産の「取り扱い」に対して、非常に示唆に富む発表であったと言えよう。

シンポジウム最後の発表者は石川県羽咋市教育委員会学芸員の中野知幸氏で、羽咋市の史跡の保存と活用をテーマとした発表であった。1978年に発見された同市内の寺家遺跡の紹介とともに、そこに地域の子どもから大人までが多角的に関わっていく仕組みづくりについての議論がなされた。特に中野氏の発表は、地元石川に関係するばかりでなく、郷土の歴史を大切にす住民たちをどのように育成するかといった観点からも示唆に富むものであった。博物館の活動基本の一つである教育という側面からも、多くの専門家たちにとって大変参考になる発表だったと言えよう。

この後、足立教授、菅原准教授、谷川助教も登壇し、全体のパネルディスカッションが進められた。アレクサンドリアの博物館・図書館など、普段見聞きする機会の少ない施設の活動に関して、会場から多くの質問や議論がなされただけでなく、金沢大学における研究活動の発展可能性や教育活動の重要性なども再確認することができた。このディスカッションの記録も、本論文集に掲載した。ぜひ参照頂きたい。

3. 文化遺産国際協力ネットワークユニットのこれから

以上のように本シンポジウムは、極めて充実した内容となった上、ユニット活動のこれまでの蓄積がうまく外部の研究者らと繋がりながら発表される大変すばらしい機会となった。文化遺産ユニットとしては、こうした文化遺産に関連する議論を、社会設計や地域計画的な側面と合わせていく必要性もまた感じている。そうした議論を深めるために、本シンポジウムは博物館という国や地域の施設をベースにしたが、それによって大変具体的かつ相互啓発に富む形で話し合いを進めることができたように思う。次年度（2018年度）には、よりグローバルな問題系を扱うシンポジウムを計画しており、さらに充実した文化遺産の国際協力活動に邁進したいとユニットの参画メンバー一同考えている。

なお、当日は大雪に見舞われたが、そのなか足を運んで下さった参加者・登壇者の方々には最後にお礼を申し上げたい。金沢大学は、日本はもとより世界的に見ても、文化遺産関連の研究蓄積や研究人材の厚い場所である。そうした強みを活かしてこうした取り組みを今後も継続する予定である。ご支援賜れば幸いである。

目 次

はじめに—文化遺産の発信地としての博物館	i
目 次	v
1. 基調講演記録	
1. 1 本シンポジウムの趣旨説明とフセイン・バシール氏の基調講演にあたって 河合 望	1
1. 2 アレクサンドリア図書館附属考古学博物館：アレクサンドリアの栄光 フセイン・バシール	3
The Bibliotheca Alexandrina Antiquities Museum: The Glory of Ancient Alexandria Hussein Bassir	
2. 発表論考	
2. 1 伝統的なミュージアムにおけるコレクション、展示、フィールドリサーチ —カナダ・ロイヤル・オンタリオ・ミュージアムの考古学調査とそれに関連した展示を通じて— 秦 小麗	13
The Collection, Exhibition and Field Research in Traditional Museums — Case Study on the Archaeological Research and Related Exhibitions of the Royal Ontario Museum in Canada — Xiaoli Qin	
2. 2 世界遺産があるコミュニティと博物館 —ホンジュラスのコパンルイナスの事例より— 中村誠一	23
The Community around World Heritage Sites and its Museums: A Case Study of Copan Ruinas, Honduras Seiichi Makamura	
2. 3 古墳をまもる・つたえる・まつることと博物館 吉田泰幸	33
Ancient Burial Mounds, Museum, and Public History Yasuyuki Yoshida	

2. 4 羽咋市の史跡の保存と活用 －史跡寺家遺跡の整備にむけて－ 中野知幸	45
Preserving and Using Hakui City's Historical Sites: Developing Jike Site Tomoyuki Nakano	
3. デイスカッション記録	53
4. シンポジウムの記録	63
1. 当日の写真	
2. ポスター	
編集後記	67
編者プロフィール一覧	68